

## 論文

### 『北斎漫画』と白鼠

舟橋 萌絵\*

#### 序：『北斎漫画』とは何か

葛飾北斎（1760・宝暦 10 年～1849・嘉永 2 年）は、狩野派・琳派・洋風画などの画法を学び、錦絵や読本挿絵、肉筆画といった様々な分野で、種々の題材に目を向けて独特の様式を確立した浮世絵師である。代表作には「富嶽三十六景」や『北斎漫画』などがあり、今でも人気が高い。またその画風は、日本だけではなく西欧に渡って後期印象派やアメリカの画家・研究者たちにも多大なる影響を与えたことで知られている<sup>(1)</sup>（図①）。

その『北斎漫画』は、北斎が門人や北斎画の愛好者、浮世絵関係の職人、他の画家たち、広くは江戸の庶民をも含めた多くの人々のために描いた図案集である。全 15 編のシリーズ物であり、1814 年（文化 11 年）～1878 年（明治 11 年）・「十五編」は北斎の没後）に出版された。この時、北斎は 55 歳である。版元は、名古屋の永楽屋（永楽屋東四郎）と江戸の角丸屋（角丸甚助）で、図版総数は約 4000 に及ぶ。そこには、江戸の庶民や歴史上の人物、動物、植物、建造物、日用品、風俗、神話や説話の登場人物、神仏というように、あらゆるもののが描かれている。今日、国際語としても通用する「漫画」という言葉は、この『北斎漫画』に由来している<sup>(2)</sup>。

『北斎漫画』は基本的な性格としては図案集であるが、各編には北斎が自ら書いた「豊年」「豊作」「天下泰平」「万民快樂」「和合」「福運招来」「笑う門には福来たる」といったタイトルが記載されていることから、図案を提示するだけではなく、そこに北斎なりの願いのようなものが投影されていると考えることが出来る。北斎は元来、日蓮宗の熱心な護持者で妙見菩薩の通力を信じていた。『北斎漫画』に七福神などの神や、神にまつわる様々なものが多く描かれていること等も、北斎が信仰の篤い人であったためであるとされている。

さて、あらためて『北斎漫画』を見てみると、多くの様々な動物が描かれている

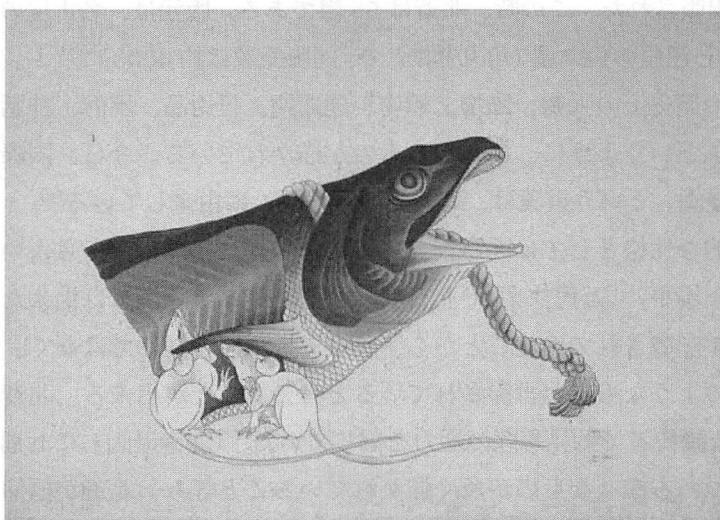
\* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

中で、鼠だけは、2ページにわたって堂々と描かれ、さらに「十編」の最後と「十二編」の白鼠のみ擬人化して描かれている。『北斎漫画』は当初、「十編」で予め終了すると定められていた。その最終巻で最後のページの締め括りには、大きく白鼠を描いており、北斎は結びの作品にも白鼠を描くほど鼠を重視していることが分かる。白鼠を重要視していることに何か意味があったとしなければならない。

他には擬人化された動物はないことを考え合わせると、北斎は鼠の図に何らかの思いを込めて描いたのであると推察される。

北斎は、鼠に興味を置いていて、鼠好きだったと言われている<sup>(3)</sup>。鼠好きというと、現在の感覚からは分かりづらいが、江戸時代の庶民が親しんだお伽草子や昔話などの“説話”では、鼠は、人々の危難を救う、災害を逃れさせる、人々に助力する等、大切な役割を担って現れており、「福」の象徴としても、鼠は人気の動物であったとされている。鼠は今日の私たちが思う以上に、江戸の人々にとっては親しいものであつたと考えられる。浮世絵にも、多くの鼠が登場し<sup>(4)</sup>、北斎自身も『北斎漫画』以外に多くの鼠を描いている。(図I) (図II) (図III) (図IV)

本稿では、北斎が『北斎漫画』の中で特に着目して描いている白鼠について分析し、鼠（あるいは鼠が多く登場するとされる説話）と『北斎漫画』の関連についての考察を試みる。北斎の白鼠に込められた思いは何だったのか、この論文では、その一端を明らかにしてみたい。



(図I) 葛飾北斎『肉筆画帖』「塩鮭と鼠」(年代不詳) 江戸東京博物館  
葛飾北斎美術館蔵



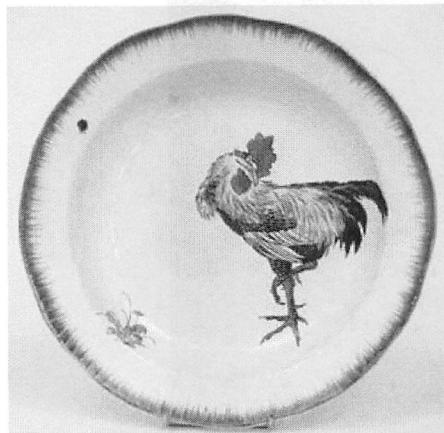
(図II) 葛飾北斎「大小曆」(寛政9年) 江戸東京博物館・葛飾北斎美術館蔵



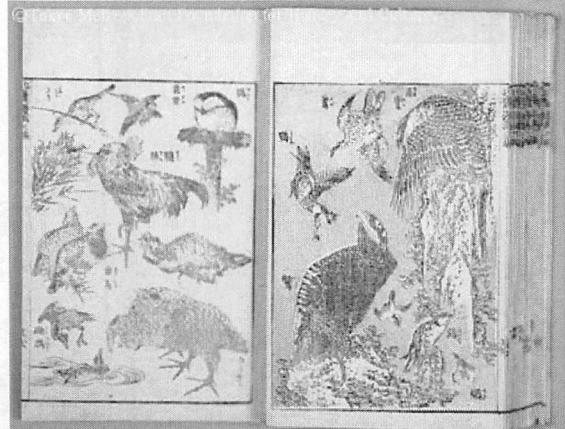
(図III) 葛飾北斎『北斎漫画』「十四編」「銀鼠」(1814年～) 江戸東京博物館  
葛飾北斎美術館蔵



(図IV) 葛飾北斎『胸中算用嘘店御』「ねずみざん」(享和3年) 江戸東京博物館蔵



(図①) フェリックス・ブラックモン  
『雄鶏に花図深皿』(1867年)  
フェリックス・ブラックモン  
ユ・エ・モントロー陶器工場蔵  
フランス国立図書館蔵



葛飾北斎『北斎漫画』「三編」(1814年～)  
江戸東京博物館  
山口県立萩美術館浦上記念館蔵  
※(左ページにある“鶏”的画をブラックモン  
クレイは引き写したと考えられて  
いる。)

## 第1章 有情が棲む世

### 1. 『北斎漫画』に描かれた生物・事物

『北斎漫画』には森羅万象様々なものが描かれているが、特に生物を全編にわたって多く描いている。『北斎漫画』に描かれている生物・事物については下記（表Ⅰ）を参照してほしい。

犬や兔、鼠など浮世絵に描かれた動物や、干支や神話、昔話に登場する動物、見世物として登場した象やラクダ<sup>(5)</sup>（図②）、龍や河童などの化物や妖怪が事細かに描かれている。

当時の世相や庶民の飾り気のない姿、エネルギーが凝縮された市井風俗、様々な生物、実在する事物、想像上の事物を多数描き、和漢の故事人物（道教、仏教の神仏）、山水画を構成する山や舟、樹木、家屋、滝、更に北斎は、白鼠や龍など神話や説話にも登場する動物や、風神・雷神をはじめとする神仏、七福神や神社仏閣、北斗七星といった人間の力を越える神聖な意味の込められた絵を、多岐にわたって描いていることもこの表からうかがえる。

『北斎漫画』「初編」「二編」には、江戸庶民の稻作の様子が描かれているのだがそのすぐ近くには兎がいる。（図③）中国においては、兎は仙薬を搗いていたと考えられているが、日本では餅についていたとされている。これは満月＝望月からの連想であり、兎と餅は「稻作」とのかかわりを想像させる。

近畿地方を中心とする西日本では民俗信仰として兎が、豊穣を司る「山の神」や「田の神」と見做されている。赤田光男（『ウサギの日本文化史』）は近畿地方では複数の事例として兎を山の神の使者や「山の神」そのものと見做し、白兎は初春に稻の種をまき、秋に稻の落穂を拾うといった伝承が存在することを述べている。

また、東北地方では「山の神」は女性の出産を司る産神と考えられており、兎の多産性のことも考えると、兎は豊穣の神として定めることが出来る。

(表 I)『北斎漫画』に描き表されている事物

生物	歴史上の人物（著名人）	六歌仙（在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大友黒主・文屋康秀・小野小町）、釈迦、空海、日蓮、鳴神、老子、松尾芭蕉、安倍仲磨呂、中納言行平、藤原忠文、藤原実方、伊賀局、柿本貴僧正、楠木正成、天拝山（菅原道真）、源頼朝、葵上、守屋大臣、西行法師、山辺赤人、大友真鳥、兼道、大塔宮、おかめ（お福）、藤娘、楊貴妃、巴御前、弁慶、源頼光、源義経、千利久、紫野一休禪師、唐子、藤太秀郷、雪女、太田道灌、能登守教経、大江山酒呑童子、東方朔慈童、香具師、志道軒、曾呂利、五斗兵衛、狂月坊、佐渡国同三狸、飛彈の匠、大苦辺尊、大戸之道尊、稚産靈日神、黄帝元妃西陵氏、劉玄徳、王母、武ノ内、孔明、留女、蟬丸、宗鑑、松永貞徳、小野道風、三浦大助
宗教者・仙人	釈迦、空海、日蓮、鳴神、豊干禪師	
庶民・職人	荷車を引く人/押す人、木材を運ぶ人、餅を焼く女、餅を搗く人、神主、獅子舞、鼓を打つ人、謡をうたう人、凧あげする子供、半裸で髪を結う女、糸車を回す女、三味線を弾く人、琴を弾く男、尺八を吹く男、囲碁する男、縁台に腰掛けキセルを使う男、童子の遊び、僧侶、喧嘩する者、そばを喰う人、相撲取り、髪結、鳥追い女、酔っ払い、風呂に入る女達、寝転ぶ男、うたた寝する人、農作業に従事する人々、旅人、雀踊りする人、弓心の稽古、馬（乗馬）の稽古、浮き輪で水中を泳ぐ男、魚を捕まえる男、留女、夜鷹、脱衣婆、鬼婆、山姥、奴、能、農作業、漁師、海女、籠を編む人、炭団職人、按摩、獅子舞、鍛冶屋、芸者、遊女、官女、公家、畠職人、二八そば屋、傘張り、観相をする人、武士、ばてふり、山で岩石切り出し作業をする人	

生物	風俗・神話・説話の主人公		金太郎、浦島太郎、桃太郎、孫悟空、殷の妲妃、天狗、高砂、鼠、兔、狐、三玉の亀、龍、翁、家久連里
	動物	実在する動物	鼠（白鼠）、兔、象、ラクダ、犬、猫、トラ、牛、獅子、羊、山羊、狐、狸、いたち、猪、猿、馬、キリン、リス、鹿、ブタ、ナマケモノ
		想像上の動物	白沢（白澤）、三玉の亀、猿、龍、鷹龍、雨龍
	鳥		鶏、雀、ツバメ、鳩、鶯、鶴、水鳥、烏、鴨、鷹、鶲、雉子（キジ）、アヒル、エトピリカ、駝鳥、錦鶏、雷鳥、かいつぶり、みみずく、山鶲、千鳥、比翼鳥、ペラ鶲、軍鶏、カラス、鶲
	虫（両生類・爬虫類含む。）		蝶、かたつむり、トンボ、蜂、きりぎりす、蝉、ミミズ、アメンボ、いなご、やもり、いも虫、幼虫、蚕、トカゲ、蜘蛛、バッタ、蟻、鈴虫、マツ虫、虻、なめくじ、蛙、蛇
	魚		鰯、フカザメ、フカ、鯨、カマス、エイ、アタリイカ、穴子、ヒラメ、カレイ、アジ、サンマ、蟹、亀、タコ、フグ、エビ、カサゴ、鰻、ナマズ、ヤドカリ、このしろ、ほうおう、龍、応龍、雨龍、单龍、うわばみ
	貝		シャコ貝、桜貝、アコヤ貝、アサリ、シジミ、アワビ
	草花（植物）		桜、梅、菊、木蓮、たんぽぽ、藤、百合、芥子の花、芍薬、睡蓮、葉蘭、菖蒲、キキョウ、朝顔、撫子、蓮、アヤメ、おみなえし、芭蕉、山葵、木の実、とうもろこし、筑紫、まくわ瓜、栗、芋、つるいちご、葡萄、ざくろ、茄子、冬瓜、瓢箪、大根、蕪、浅瓜、銀杏、紅葉、松林、ススキ、雪が積もった樹木

無生物	神仏・俗神	風神、雷神、七福神（恵比寿・大黒天・弁財天・福禄寿・布袋・毘沙門天・寿老人）、天狗、猩々、鳳凰、四天王（持国天・增長天・広目天・多聞天）、力士像、開公之像、大元帥之像、禅宗之迦藍神、正八幡大菩薩、馬齋尊神、摩利支尊天、殷の姫妃、稻荷大明神、天狗面の猿田彦大神
	幽霊・妖怪	河童、人魚、海馬、水犀、天狗、海鼠、水獺、濡れ女、白澤、土蜘蛛、鬼女、鬼婆、ろくろ首、雪女、山姥、鬼、船鬼、女の幽霊、子供の幽霊
	奇態の事物	長脚男、長耳男、三身、羽民（羽のある人）、後眼
	舟	軍艦、商船、筏
	橋	日本橋、竹の橋、木の橋
	建造物・構造物	舟、橋、楼閣、灯籠、車、門、家、店、集落、石像、寺、神社、門、鳥居、城
	日用品	やかん、お茶の缶、かまど、お椀、お茶碗、皿、家具、花瓶、壺、急須、湯のみ、大判、小判、鍋、七厘、斧、草刈、塵取り、蠅燭立て、包丁、置物、巻物、火鉢、桶
	お面	大天狗、小天狗、能面、おかめ（お福）、ひょっこり、猿、狐、鬼、般若、七福神、人のお面
	波	波二態、寄せる波、引く波、渦巻水、浅瀬、大波
	山水風景	富士山、甲斐の巴山、摂津の住吉、肥前稻佐弁天、上総八幡の銀杏、甲斐の猿橋、相模走り水、海、風、雨、霧、雷、雪、信濃小野の滝、駿河三保の松、甲斐鰍沢、甲州矢立の松、相模浦賀、上州椿名、甲州三島越
	星	北斗七星
	その他	手品、岩、天国、地獄、遠近法の構図、文様

## 2. 擬人化と鼠

『北斎漫画』全15編には様々な種類の動物たちが数多く描かれている。北斎は、動物たちを動物そのものの姿や形、つまり“真”の姿で主に描いているが、「十編」(図④)と「十二編」(図⑤)の2図のみ白鼠に衣服を身に着けさせ、擬人化して描いている。『北斎漫画』の中で擬人化された動物を描いたのはこの2図だけであり、擬人化されている動物は鼠のみとなっている。

『北斎漫画』全編に描かれた他の動物の絵と比べてみると、擬人化された白鼠の2図は既に述べたように大画面で表され、2ページにわたって描かれている。しかも『北斎漫画』「十編」の鼠の図は、「十編」の一番最後に大きく描かれている。『北斎漫画』は、元々「十編」で終了とされていたため、その最終刊である「十編」にまるで『北斎漫画』のまとめを示すかのように堂々と描いていること等を考えてみると、北斎は鼠の図に何らかの思いを込めて仕上げたのではないかと思われる。

北斎の作品に見られるように、鼠は鼠でも特に白鼠<sup>(6)</sup>が描かれており、それは人々に好まれ、瑞兆として喜ばれたと言われている。江戸では当時、白鼠は特に珍しく、縁起の良い動物として親しまれていた。なかなか手に入らない白鼠を見つけた場合には、朝廷に献上されたという記録も歴史書の中に残っている<sup>(7)</sup>。

当時、縁起の良い白鼠を飼う庶民も多かったと言われている。江戸で出版された鼠の飼育本には、世の中のことわざに世にもまれなる良い手代（商家の使用人で丁稚と番頭の中間の身分の者）、あるいは家業を大切にする召使いのことを「白鼠」と呼ぶ理由について述べられている<sup>(8)</sup>。

鼠（白鼠）は幸福の象徴であると同時に、子どもをたくさん産み、子孫は絶えず、長寿であると言われている。そうしたことが、北斎を始め、多くの人々から鼠が好まれた理由であったのであろうと推察される。

### ① ペットとしての白鼠

現在では、鼠は人間の食物等を盗み、害をもたらす動物と一般的には考えられている。しかし今日とは異なり、鼠は当時、江戸で流行したお伽草子や昔話の他に、「鼠の相撲」と題した、鼠が動物たちと相撲をとる様子が描かれた作品や、正月に多く刊行され干支を表現した作品等にも多く登場しており、北斎などの浮世絵師たちが多く鼠を描いていることからも、江戸時代鼠は町民の間でも特に人気の動物であったと言われている。江戸時代の中期には、定延子<sup>(9)</sup>による『珍観鼠育草』(錢屋長兵衛板) (図⑥)<sup>(10)</sup>という鼠の育て方が記載された“飼育本”が発刊されており、特に

鼠は人々から親しまれており、ペットとして飼われていたことがうかがえる。

1787年（天明7年）に刊行された「珍観鼠育草」は鼠の飼養の他、鼠の由来、愛玩用としての鼠の図、鼠の種類、育種法などが書かれている。

「珍観鼠育草」の序文には、次のように鼠の能力について過大に評価した記述があり、江戸で鼠が人々から親しまれていた当時の様子がうかがえる。

“序。鼠家にありて善惡をしる。必ず鼠集まる時は近き吉事あり。子は干支の初めにして卦は即ち良なり。三百歳の寿を経て、人に憑て年中の吉凶千里の外之事をしれり。今又こぞって鼠を**玩ぶ**こと目出度き御代のしるしなりと端書して言う。”

天明七ひつじの正月 定延子

「珍観鼠育草」に描かれている鼠と、鼠を手のひらにのせて可愛がる子供の様子からも、当時江戸で鼠がペットとして家で飼われていたことがよく分かる。（図⑦）

『近目貫』といった江戸時代に流行した小咄集の中では、「鼠」と題する、“ペットとして鼠を大切に育てる女郎”の作品があることが述べられ、小咄と共に当時、流行した川柳からも女性がペットとして鼠を可愛がっていた様子がうかがえる。

“切見世のおしょく鼠を寵愛し”

“新造の憂きが友には鼠なり”

このように鼠をペットとして飼うことが江戸社会では広く行われていたことが分かるのである。

## ② 福の象徴と予知能力

江戸時代には「鼠」という文字が使われた店（鼠屋）が4軒もあったと長谷川恩は述べており、当時鼠は評判の良い動物であったことがここからもよく分かる。名称はそれぞれ京都室町下立売上屋にあった組糸屋の「鼠屋和泉」や江戸の煙管屋の「鼠屋」、江戸人形町の芝居小道具屋「鼠屋」、そして島原の娼家にあったとされる「鼠屋」であり、当時これらは評判の良い店であったと言われている。鼠屋の命名の根拠は、鼠が福をもたらすという一般的な信仰がその根底にあったと言われている<sup>[11]</sup>。

鼠は、「鼠の淨土」や「かくれ里」などのあらゆる説話、柳田国男（『海上の道』）や長谷川恩が述べているように海から来る神・稻作・福をもたらす神と言われており、人々はそれを信じ、縁起の良い動物と考えられていたという説がある。

じょうえんし ちんがんそだてくさ  
先に述べた定延子による『珍観鼠育草』の序文には、「必ず鼠集まる時は吉事あり」とあるように、鼠が集まるのは吉兆とされ、鼠が家から去ってしまうと家運が傾くと考えられている。

同書の序文に記されているように、鼠には将来を予見する力があるとも言われている。事実、中国で鼠は人が科挙に合格するかどうかを予知すると考えられており<sup>[12]</sup>、長谷川恩によると先年の中国での大地震の際も、これに先立って鼠の移動が行われたという報道もある。

日本でもこうした事例はいくつか記録に残されている。『耳袋』（初編3）<sup>[13]</sup>には、紀州（和歌山県）黒井村が津波に襲われる前夜、この島の鼠が対岸の加田に泳ぎ渡ったという説や、『日本書紀』では遷都に先立って新都に移動した鼠の記録が残されている。

このようなことから鼠は、予知能力を含めて頭の良さに対する評価が高く、福を運ぶ動物としてだけではなく、優れた動物・神として崇められ、人々から親しまれていたと言うことが出来る。

戸川幸夫『イヌ・ネコ・ネズミ 彼らはヒトとどう暮らしてきたか』は、能力の高い鼠に異名があることを指摘している。鼠を「福の神」や「福太郎」等と呼ぶこともあり、これは「福」の象徴であり、神とされる鼠を、直接「鼠（ネズミ）」と名を呼び捨てにすると、縁起が悪く、禍を招くという考え方からきていると言われている。

こうしたことからも、鼠は単なる動物ではなく、人々にとって特別な存在であり、偉大な動物（神）であったと考えられる。『北斎漫画』の中で特に鼠に着目して描いているのも、北斎自身興味をひかれていたことや、当時鼠が流行していたことなどと共に、鼠が人々に福をもたらし、縁起の良いものとして考えられていたため、鼠を一つのテーマとして選び、それを「幸福」の象徴として大きく描いたのだと考えることが出来る。

### ③ 擬人化表現

これまで見てきたように、鼠については多くの説があるが、そもそも鼠はなぜ、お伽草子や昔話、浮世絵等の作品で擬人化されたのか、そして鼠等の動物だけでは

なく、あらゆるものがなぜ擬人化して表現されたのかという疑問が起こる。

擬人化は、見立ての表現技法であり、『北斎漫画』の鼠の描写をはじめ浮世絵やお伽草子、昔話に多く見られる。動物など人間以外のものを人間になぞらえて描くもので、そこには人間主体の考え方があるとされている。

人々は動物の生態の中に人間を発見しようとする。また動物の生態の中に込められた思いを読み取り、相手に伝えることが出来るのが擬人化の特徴であると考えられる。

擬人化された動物が人間のような動作をしたり、口をきいたりしただけで滑稽味が漂う。動物に擬人化表現が使用されるのは、人々を呼び寄せ、安心感を人々に与え、注目させる力があるからであると推察される。

動物の生態を描くことで愛情や、生命の大切さを感じることも出来る。地球上に人間は動物と共に共生しており、時に互いに影響を及ぼし合いながら生活している。世の人に豊かさや心のゆとりを与えてくれているのがこうした自然のものたちであると思われる。

前述した通り、江戸時代鼠は「福」をもたらす縁起の良い動物と考えられており、人々に親しまれていた。鼠をお伽草子や昔話、説話に登場させることは、多くの人々を楽しませ、喜ばせることが出来ると制作者は考えたのだと思われ、こうしたことが鼠（白鼠）が他の動物に比べ、多く説話に登場した理由の一つであると考えられる。

更に、江戸で特に人気のあった白鼠に、人間に見立てて楽しませることの出来る擬人化の表現を使用して人々にその親しみやすさ、楽しさを伝えたのだと思われる。より多くの人々に擬人化の重要性を伝え、神聖な意味が込められた鼠に親しみが込められるように制作者側は考えたのではないだろうか。

『北斎漫画』に表されている白鼠が擬人化されているように、お伽草子や昔話を始め、多くの作品においても鼠は、擬人化した姿で登場することが主である。当時流行し、人気のあった白鼠に、擬人化という表現方法を用いることで、白鼠は今以上に人間と近しい存在と感じられ、より人々に親しまれることとなり、その結果、今もなお白鼠は擬人化された姿で描かれていることが多いのだと思われる。

鼠は他の動物に比べ、説話に登場し、擬人化されることが多いのであるが、そもそもすべての動物が擬人化されることはない。白鼠のように擬人化された姿で多く登場する動物もいれば、擬人化されずに動物そのものの姿で説話に登場する動物も存在する。事実、お伽草子や昔話にある『かくれ里』<sup>(14)</sup>には、擬人化される動物と

擬人化されない動物がいる。

『かくれ里』で擬人化された動物は鼠や犬、蝙蝠、魚であり、擬人化されない動物は馬や象、猫、鷹、鰐となっている。このように分かれる理由として『かくれ里』での動物の扱いを考えてみると、擬人化されていない動物は人間社会におけるそれぞれの動物たちの役割がそのまま割り当てられている。つまり、人間との生活領域のかかわり方によって擬人化される動物とされない動物とに分けられるのではないかと考えられる。

『北斎漫画』に描かれている白鼠は、衣服を身に着け、二足歩行や二本足で立つ姿で表現されており、まさに人間のようである。お伽草子や昔話など、どの作品においても鼠は動物としての役割が割り当てられておらず、働く様子・祭りを祝うといった人間と同様、人が行う動作として表されている。白鼠は、当時人々から好まれ、ペットとして飼われ、時には別の鼠が家に住みつくなど、常に人間の近くにいた動物である。人間にとて白鼠は他の動物に比べて馴染みのある、親しみやすい動物であったため、擬人化の表現が使われたのだと考えられる。また、人々は神のような存在でもある鼠を単なる動物と捉えず、特別な存在として考え、擬人化表現を使用し、より多くの人々に注目させ、親しみや安らぎを与えるように作られていたのだと思われる。

## 第2章 説話から見る福の神 一鼠一

### 1. 説話の沿革と鼠の物語書

擬人化された鼠は、お伽草子や昔話をはじめとする説話の中に登場することが多い。

お伽草子は、南北朝時代後半から江戸時代初頭にかけて成立した短編の絵入り物語である。主題は口頭で伝わった民間説話で、庶民や神仏、擬人化された動物等を主人公とした話が多い。松本隆信『御伽草子集 新潮日本古典集成(第34回)』は、物語の内容を分類すると公家物、僧侶・宗教物、武家物、庶民物、異国・異郷物、異類物の6種類となると記している。

お伽草子の名称は初め、江戸時代（18世紀前期）に大阪の渋川清右衛門によって刊行された『御伽文庫』23編に対して用いられたと言われている。その23編は下記の通りである。

文正草子、鉢かつぎ、小町草子、御曹司島わたり、唐糸草子、木幡狐、七草草子、猿源氏草子、物ぐさ太郎、ざざれ石、蛤の草子、小敦盛、二十四孝、梵天国、のせ猿草子、猫の草子、浜出草子、和泉式部、一寸法師、さいき、浦島太郎、酒顛童子、横笛草子

元々、「御伽草紙」の語は渋川版の商標のようなもので、当初は 23 編のみを「御伽草紙」と言ったが、後に 23 種に類する室町時代を中心に成立した物語作品全体に広げられてきた。

鼠が主人公の物語は、お伽草子の中では『鼠草子絵巻（別名、鼠の権頭）』、『かくれ里』、『鶏鼠物語』、『弥兵衛鼠絵巻』の 4 種類あり、お伽草子の中でも鼠の話は多く書かれており、庶民の間でも異類物語に属するこの 4 種類は特に人気があったと言われている<sup>(15)</sup>。

鼠が登場する話や鼠が主人公の話は、昔話にも多く存在する。「鼠の浄土（別名、おむすびころりん）」<sup>(16)</sup>や「かくれ里」、「鼠の相撲」、「猿と猫と鼠」、「鼠経」、『田家茶話』、「鼠の助け」<sup>(17)</sup>、「子供を育てた鼠」、「鼠の婿選び（別名、鼠の嫁入り）」等があり、お伽草子同様、こうした鼠の物語は他の動物の物語に比べて多く、人々に親しまれた説話であったと言われている。

## 2. 『北斎漫画』と鼠のかくれ里

『北斎漫画』「十編」（図④）の最後のページには、擬人化された 17 匹の、江戸の商人や奉公人の姿をした白鼠が描かれている。手前に網縄を使い食糧を集める鼠や、それを記帳する鼠、左側には米俵を運ぶ鼠や米の数を数える鼠が描かれ、後方には天秤棒を使い、集めた物は金で買い取るのか、食物や小判のようなものを籠に入れ、運ぶ鼠など、鼠たちの働く様子が滑稽な仕草で、巧みに生き生きと描かれている。

鼠の周囲には岩や草だけが描かれてあり、空が表現されていないことから地中か、もしくは山奥、洞窟を抜けた先の様子を描いたものではないかと私は考える<sup>(18)</sup>。

画中の右下には「家久連里（かくれ里）」という文字が記されている。

「かくれ里」とは、白洲正子『かくれ里』によると、貴人や落人が世を避けて隠れ忍ぶ村里であり、民俗学では山に住む神人・神聖なる動物が、冬の祭りに里へ現われ、鎮魂の舞を舞った後、いずこともなく去って行く山間の僻地を言い、秘境と呼ぶほど人里離れた山奥であると考えられている。

またお伽草子や昔話などに登場する人里遠く離れた場所にある鼠の住みかで、一種の仙郷であり、「かくれ里」には人間の世界とは異なる時の流れがあり、人々の求める理想郷への思いが込められている“平和な世界”であるとも言われている。

お伽草子の「かくれ里」や「鼠草子絵巻」(図⑧)には、鼠が住む世界である地下の“かくれ里”的描写があり、昔話の「鼠の浄土」や「かくれ里」、また鳥山石燕による『今昔百鬼拾遺』の「かくれ里」(図⑨)にも“かくれ里”に住んで、福をもたらし、善人に米や食物、金銀を与える鼠の様子や“かくれ里”で、多くの鼠が穀物などの食料や小判を集め、暮らしている様子が表現されている。このようなことから北斎が『北斎漫画』「十編」に描いた擬人化された鼠は、お伽草子や昔話に登場する鼠を描いたと考えられる。

清水歎(『北斎漫画 日本漫画の原点』)は『北斎漫画』「十編」の擬人化の鼠は、食糧や小判、米俵など様々なものを管理していることから当時の人間社会を鼠という動物に置き換えて、小社会を表現していると述べている。

先に述べた通り『北斎漫画』「十編」に描いた鼠は、白鼠である。白鼠は吉兆であると同時に忠実な働き人を意味する。やはり、働く当時の人々の様子を白鼠に置き換えて、表現したのであろうと考えられる。

以上のことから北斎は、お伽草子や昔話の福をもたらす鼠、「かくれ里」、そして当時の世相をも描き表し、人々に労働する知識や教えを伝えたと考えられる。

### 3.『北斎漫画』と七福神

七福神は、福德をもたらす神として信仰されている 7 人の神で、インド・中国・日本に伝わる信仰対象を組み合わせて竹林の七賢などにならって室町時代に「七」に整えられ、福の神としたものである。

『北斎漫画』のテーマは「豊年・豊作」、「幸福」、「福運招来」等であり、縁起の良いものや福や神にまつわるものを『北斎漫画』に多く描いていることから、信仰の篤い北斎が縁起の良いもの、そして幸福や笑いを求める江戸で人気があったことから七福神を描いたと考えられる。庶民だけではなく、北斎自身にとっても神という存在は大変偉大であり、興味深いものであったと思われる。

追加刊行された『北斎漫画』「十二編」(図⑤)には「笑門に福来る」をテーマとして擬人化された侍のように袴を着けた 1 匹の鼠と七福神が、大画面 2 ページにわたって描かれている。

この図は、笑いのある日常が健康のもとであることを表現している。フク（福）を釣り上げ、喜びに満ち溢れた恵比寿や、酒を飲み上機嫌な大黒天、二股大根に女性を連想する布袋、長い頭を頭巾で隠し、遊廓へ出かけようとしている寿老人、そして唐子が大黒天の腹に絵を描いている様子や、白鼠が描かれている。正に福德に満ちた絵図となっている。

## ① 白鼠と七福神

北斎が白鼠を七福神と共に描いていることについては、様々な理由があると言われている。鼠は米を集め、海を渡ることから稻作や海の神とされ、また七福神と同様、福をもたらす象徴としてお伽草子や昔話にも登場し、特別な存在として崇められていたため、説話に登場する擬人化された鼠を、「福」の象徴である七福神と共に描いたと思われる。

そもそも白鼠（擬人化された鼠）は神様の一員として崇められていただけではなく、七福神と深いかかわりがあったと考えられている。お伽草子の「かくれ里」では、白鼠は七福神である大黒天の使者として表現され、恵比寿や布袋とも共に登場している。「弥兵衛鼠絵巻」では、鼠が常磐の里の長者左衛門の一家から大黒天の使者として大切にされる描写がある。稻田浩二（『日本昔話 ハンドブック 新版』）や松本隆信は、説話やあらゆる昔話において鼠は七福神の一人である大黒天の使いであると述べ、鼠は神の使者と信じられてきたことを指摘している。

清水歎は『北斎漫画 日本マンガの原点』の中で、鼠（『北斎漫画』「十二編」の「笑門に福来たる」に描かれている白鼠）は、昔から大黒天の使者と言われ、吉兆の象徴であると述べている。そして、鼠の鳴き声の「ちゅー」から忠実に仕える使用人や番頭を指してきたといったことも指摘している。

## ② 「走り大黒」の鼠

長谷川恩や笹間良彦（『大黒天信仰と俗信』）は南方熊楠の『十二支考』の中の「鼠に関する伝説と民俗」の項にある『譚海』（卷之十二）<sup>(19)</sup>を引用して、日光市中禅寺湖畔の中禅寺に、波之利大黒天（「走り大黒」）というお符があり、波之利大黒天（「走り大黒」）を祭った堂があることを述べている。このお符は、失くし物等に靈験あらたかとされているが、信心に懈怠の心があるとたちまちその人から離れてしまうと言われている。『譚海』（卷之十二）によると、住吉中禅寺に年功経た大鼠がいて所蔵する多くの経を、食い破ったり諸方を噛んだりする被害が甚だしかったため、捕

まえようとしたが逃げられたと記されており、下野国（栃木県）の足尾という所まで鼠を追い、ようやく鼠の足に緒を引っかけて捕まえた後、この鼠の死骸に墨を塗り、紙に押してみると、それが大黒天の像を写し出したと書かれている。そこで鼠の死体を大切に扱い、「今日波之利大黒天像」（「走り大黒」）としてお札に押して信者に与えたと言われ、大黒天は鼠と深いかかわりがあったことを考えることが出来る。

### ③ 『古事記』と甲子の日（甲子祭り）の鼠

えびす宮総本社西宮神社には室町後期の1564年（永禄7年）に作られた金無垢の恵比寿・大黒像がある（「福神」「悠久」64号・特集「七福神信仰」）所収による）。この像には、「永禄七甲子年 正月吉日、佐州、開運招福、春短造」との銘文がある。永禄7年の干支は甲子であり、甲子の日は、甲子大黒といって大黒をまつることが行われたと言われている。甲子の子は十二支の鼠を指す。

『古事記』に鼠はすでに姿を見せており、鼠が大国主命を助ける場面がある。大国主命が野火に囮まれて焼き殺されそうになつた時、鼠に救われたのである。その後、時代が進むにつれて、民間信仰で大国主命は、大黒天と同一とされるようになり、大黒天と鼠は深いつながりがあると考えられるようになった。三橋健は、そのようなことから子の日に大黒をまつり、鼠は大黒天の使者として考えられるようになったと述べている。

実際、大黒天と鼠は深いつながりがあり、大黒天の使者・家来と考えられていたことからも鼠は幸福をもたらす神の使いであり、尊いものとして扱われている。福德を祈って大黒天と共に鼠に擬した黒豆を祀る甲子祭りは、人々に親しまれた行事として知られている。この甲子祭りは十干の初めの「甲」と、十二支の初めの「子」が合する年の夜に大黒天と白鼠を祀った行事である。

「甲」と「子」という両方のトップが合わさった年は、一層特別な意味が与えられ、記念とされることになる。江戸時代後期に出版された松浦静山著『甲子夜話』の題目も、その起稿の日である11月17日の干支をとっての命名であるとされている。このように当時から毎年甲子の日は特別な待遇で受け入れられ、とりわけ大黒天と白鼠を祀る甲子祭りは特別な行事であり、重んじられてきたことがうかがえる。

江戸時代の商家では甲子の前夜に、子の刻（午前零時頃）まで起きて大黒天に二股大根や黒豆を供えてまつる風習があったと言われている。『北斎漫画』「十二編」にも二股大根が描かれていることから、北斎はこの甲子祭を表現し、大黒天と鼠を

共に描いたのだと考えられる。

『鋸屑譚』<sup>(20)</sup>に「日蓮上人三面大黒天の讚文云、甲子の日毎に生黒豆百粒を以て然るべし。是秘中の秘」とある。これは、甲子の日（甲子祭り）に大黒天を祀る時には黒豆百粒を供えるという意味であり、大黒天と鼠との関係を示すものである。また、密教は深遠なることは人に授けても理解し得ないため秘法とした反面、些細なことまでも秘伝としたので、拳印がその神仏の力を示す秘法と同様に、黒豆を鼠に擬したことも「秘中の秘」とされた。鼠に擬したこの黒豆は、大黒天の意向を得るために供えたものであるから、当時すでに鼠は大黒天の使いと考える風習があったことを示すものである。

甲子祭りは地方においては昭和の戦前まで行われていたと言われており、多くの人々に長く親しまれていた行事であったと考えられる。

このように考えるならば、『北斎漫画』「十二編」の「笑門に福来たる」は、江戸時代でも盛んに行われていた甲子祭りに供えると言われている二股大根と、黒豆を擬したとされる鼠を大黒天と共に描いていることから、甲子祭りを表現したものであり、北斎は大黒天と鼠とのかかわりを意識し、強調して描いたのだと考えることが出来る。

#### ④ インドと日本の鼠

笹間良彦や三橋健は、大黒天と鼠が結び付けられるようになった理由について様々な説を挙げている。インドでは聖天（ヴィナーヤカ）は鼠の上に乗る姿に表現され、鼠は“神獣”的一種として考えられている。しかし、日本における仏神で鼠を従者と見るのは、大黒天のみである。笹間良彦は、大黒天と鼠の結びつきは大黒天が、厨房や食物庫の神と考えられるようになってからであると説いている。『南海寄帰内法伝』（巻一）<sup>(21)</sup>や『不空羈索神変真言経』<sup>(22)</sup>によると、インドの仏教寺院では、大黒天を厨房や食物庫の守護神として崇拜してきたと考えられており、こうした性格の大黒天が日本へ伝わったとされている。今日のように家庭内の鼠が追い払われた状態と異なり、昔は今以上に鼠の繁殖率が高く、鼠害は大きかった。その中でも特に被害が大きく、鼠が多く棲んでいた場所は食物のある厨房や、倉庫であったと言われている。

害を出さぬように押さえ、「大神力」をもって従わせることが大黒天であるため、こうした点からも鼠が大黒天の使いであるという考えが生まれてくる。

この他に、大黒天は暗黒（黒）の神であると言われている。密教では黒は北を意

味し、子を鼠に当てはめると、十二支の鼠（子）も北であることから、こうした点からも大黒天と鼠は結び付けられると考えられる。

このような理由から、大黒天が人々に福を授けるのに、その施しの使者が鼠であるという説が生じたのであろう。家によっては鼠が棲んでいても「福」のいる証拠として鼠を駆除しないこともあったと言われており、このことからも鼠と大黒天は、深いつながりがあったと考えることが出来る。

## ⑤ 説話の世界画

江戸時代の絵や置物には大黒天の三摩耶形である打出の小槌に鼠を配して大黒天信仰を表すこともあるなど、絵画等の芸術の面からも鼠と大黒天の関係についてうかがい知ることのできるものが少なくない。

お伽草子の「かくれ里」にも共に登場しているように大黒天と恵比寿は、福の神の中心的な存在であり、七神の中でも常に筆頭に位置している。二神は一対となつて信仰されることが多く、二神を描いた作品は安土桃山時代の画家である長谷川等伯の「恵比寿大黒・花鳥図」（東京国立博物館蔵）や三代目歌川豊国の大黒、金のなる木など、多数ある。

河鍋暁斎とその一門にも福の神を描いた絵画が多いが、その中で恵比寿と大黒二神を描いたものとしては、暁斎画「恵比寿・大黒」が注目される。恵比寿が鯛に食いついている鼠を釣竿で追い払おうとしているところを、大黒天が押し止めているというユーモラスな絵であり、大黒天が自身の使者である鼠を庇っている作品として知られている。

鼠と大黒天を描いた河鍋暁斎の「新版大黒天福引之図」（山口県立萩美術館・浦上記念館蔵）（図⑩）は、大黒天の右手に握られた赤い紐を、大黒天の使いである鼠たちが一生懸命引っ張っている「福引き」の図で、景品の一つである“二股大根”を鼠が担いでいる様子が描かれている。やはり鼠と大黒天とのかかわりを意識して制作されたことを考えると、鼠は様々な人々から大黒天の使者として考えられていたと思われる。

大黒天は後世では七福神として頭巾を身に着け、右手に小槌、左手には袋を持って米俵の上に乗っている姿が基本とされている。大黒天が食物や米俵と関係があることからしても、稻作や米俵と共に多く描かれ、昔話にも登場し、稻にまつわる神とされている鼠とは、深いつながりがあると言える。

## 結

北斎は『北斎漫画』「十編」、「十二編」の中で擬人化の白鼠を大画面で2ページにわたって描いており、『北斎漫画』のまとめを示すよう堂々と描いていた。

特に「十編」の「家久連里」と題した白鼠の図は、最終刊とされていた「十編」の最後のページに事細かく描かれており、北斎の白鼠に対する強い思いが感じられる作品であることが理解できる。説話を元にして描いた「十編」の白鼠は、世相を反映し、社会に対して教えをも説いている。

「十二編」の「笑門に福来る」をテーマとして描いた擬人化の白鼠は、神の使いとして微細に表現され、神の代表と評される七福神と共に描かれている。北斎は白鼠を特別な動物として表現していることがうかがえる。

白鼠は将来を予見する能力もあり優れた動物・神として人々から親しまれていた。大黒天の使者と考えられていた白鼠は福の象徴であり、また大黒天と共に鼠に擬した黒豆を祀る甲子祭りは、人々に親しまれた行事であった。

「十二編」の鼠の図は、七福神（大黒天）と共に白鼠が描かれ、甲子祭りの象徴である二股大根が描写されていることから、甲子祭りを表現した作品であると言うことが出来る。

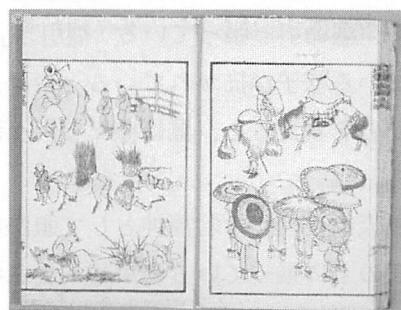
北斎の鼠に対する想いや、白鼠の能力、鼠と説話・神との関連について考察することで、改めて『北斎漫画』の魅力に気づかされる。『北斎漫画』における細部にまでこだわった北斎の画法や、知識、諸所に飛ぶ北斎独特のユーモアや機智はこの作品の大きな魅力であり、それゆえ『北斎漫画』は面白いのである。

今後の課題は、江戸時代浮世絵画の確立者である北斎の多岐にわたる作品をより一層詳細に捉え、その上で大黒天と白鼠との関わりの歴史について更に詳しく考察し、より踏み込んだ解明を進めてゆきたいと考える。



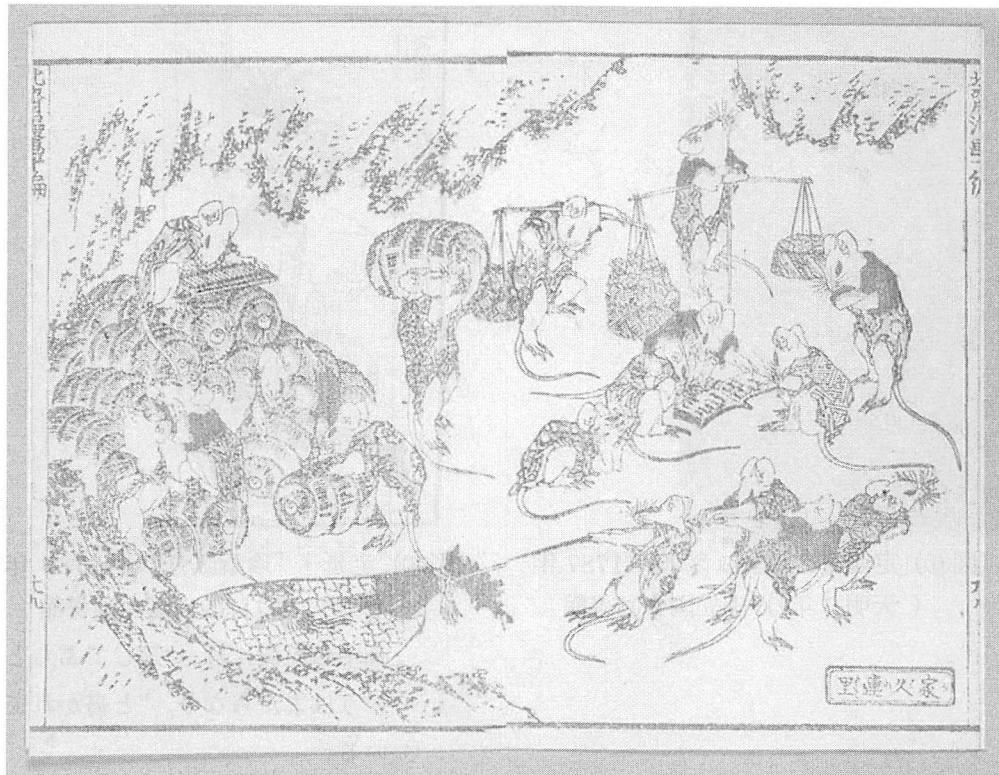
(図②) 歌川国安「駱駝之図」1824年

(文政7年) 早稲田大学図書館所蔵



(図③) 葛飾北斎『北斎漫画』「初編」

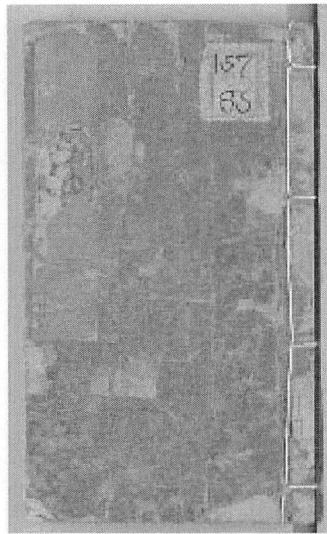
(1814年～) 江戸東京博物館所蔵



(図④) 葛飾北斎『北斎漫画』「十編」「家久連里（かくれ里）」(1814年～)  
江戸東京博物館所蔵



(図⑤) 葛飾北斎『北斎漫画』「十二編」(1814年～) 江戸東京博物館所蔵

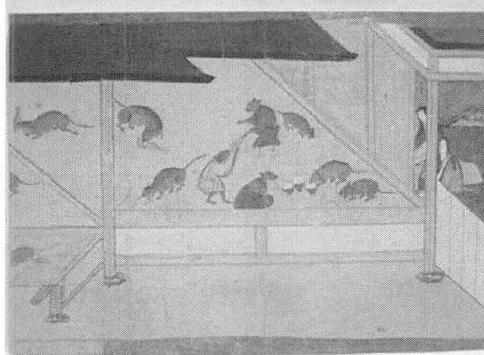
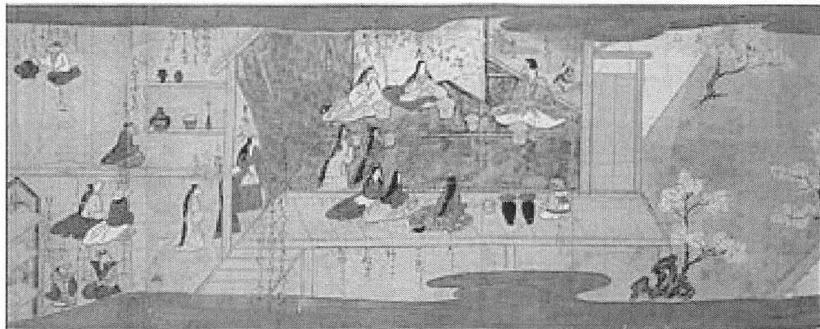


(図⑥) 定延子『珍翫鼠育草』(1787年  
(天明7年)) 国立国会図書館

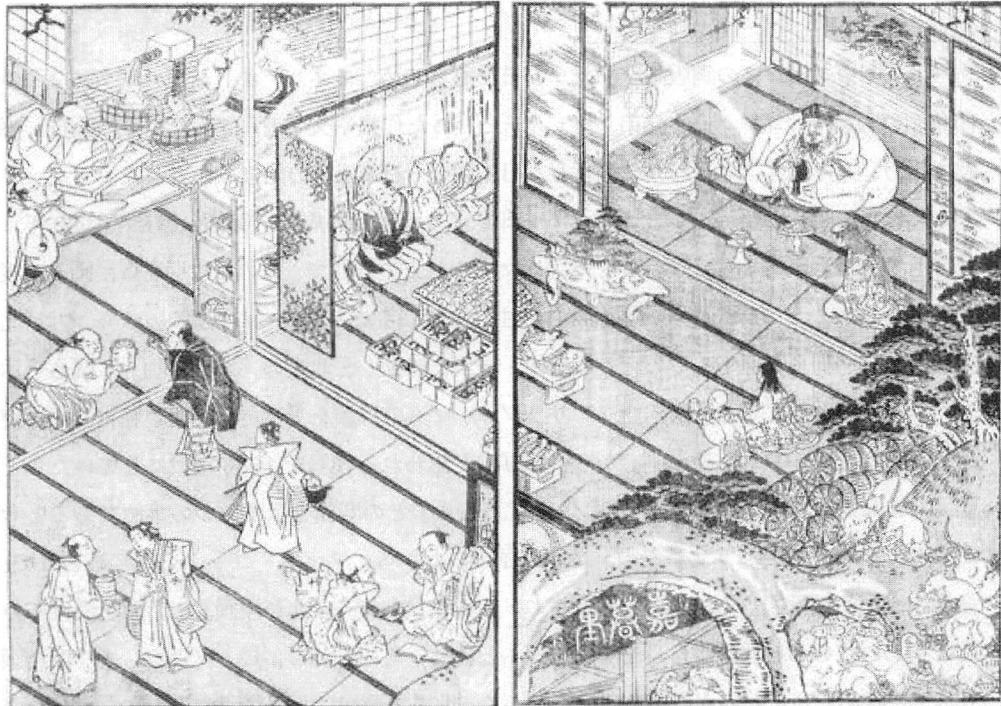


(図⑦) 定延子『珍翫鼠育草』(1787年  
(天明7年)) 国立国会図書館

画中の左側には、“惣じてぶちと  
いうはまだなり。”と書かれて  
いる。



(図⑧) 「鼠草子絵巻」(上図・下図) (16世紀) サントリー美術館所蔵



(図⑨)『今昔百鬼拾遺』の「かくれ里」(1780年) 江戸東京博物館所蔵



(図⑩) 河鍋暁斎「新板大黒天福引之図」(明治22年以前)

江戸東京博物館・山口県立萩美術館浦上記念館所蔵

- 
- <sup>1</sup> シーボルトやフランスの銅版画家ブラックモンをはじめ、モネ、テオドール・ルソーなどの印象派の画家や、ゴングール兄弟、シェノーといった作家や文学学者、評論家はその画技に感銘を受け、ジャポニズム（パリで流行した日本趣味・日本品）の始まりとされた。ブラックモンについては、大島清次『ジャポニズム 印象派と浮世絵の周辺』（美術公論社 1980年）に詳しく記載されている。ブラックモンはマネやドガの仲間で、彼の手に『北斎漫画』が渡ったことで広くこの時代の若い画家たちの注目を浴びることになった。ブラックモンは『北斎漫画』の一冊を発見し、その巧みな技術・表現に感動し、北斎の『北斎漫画』に関心を示していたと言われている。陶器商フィリップ・ルソーの依頼を受けて、陶器の焼付原画に使用した銅版画の中で『北斎漫画』から引き写しと思われる模写を1866年代にしていたことが明らかにされており、ブラックモンと『北斎漫画』との関係を示す一つの事例であると考えられている。（図①）『北斎漫画』は印象派以後もさらにファン・ゴッホをはじめとして、多数の画家や批評家などによって研究され、ピカソは北斎や『北斎漫画』に影響を受けていたと言われている。北斎が自身を「画狂人」と名乗ったことから、ピカソは自らを「西洋画狂人」と呼んでいたという説があるほどである。世界で最初に北斎に関する論文を書いたのは、アメリカ人の浮世絵収集家ジェイムズ・ジャクソン・ジャーヴィスであり、1869年という驚くべき早い時期に発表された。
- <sup>2</sup> 「漫画」という言葉は、北斎が『北斎漫画』で初めて用いた言葉であり、書物等の表題としても北斎が最初に使用した言葉である（有泉豊明『北斎漫画を読む 江戸の庶民が熱狂した笑い』による）。当時「漫筆」という言葉があった。あまり構えず、気軽に思いつくままに“漫然”と書くという意味で、北斎はこの「漫筆」という言葉を自身の画に応用して“漫画”という言葉を作ったのだと考えられている。清水歎は『四コマ漫画—北斎から「萌え」まで』の中で、漫画という言葉は北斎が初めて書物のタイトルとして使用した言葉であると述べ、『北斎漫画』の影響を受けて江戸時代から多くの書物や浮世絵等に漫画という言葉が使われるようになったと指摘している。『光琳漫画』（1817年（文化14年））や、『滑稽漫画』（1823年（文政6年））、『北雲漫画』（1818年-30年（文政期））、『漫画独稽古』（1839年（天保10年））等がその例である。『北斎漫画』の人気にあやかり、合川珉和は『漫画百女』（1798年（寛政10年））を刊行している。
- <sup>3</sup> 柳田国男『柳田国男山人論集成』（角川学芸出版、2013年）、柳田国男『神隠し・隠れ里』（KADOKAWA、2014年）が詳しい。
- <sup>4</sup> 河鍋曉斎「猫と鼠の行進」（年代不詳）や、歌川国芳「よきことを菊の十二支」（年代不詳）、作者不明「鼠の相撲」（年代不詳）等がある。

<sup>5</sup> 江戸時代には象やラクダの他に虎、駄鳥、驢馬、ヒョウ等が渡来し、見世物興行にかけられ、庶民の人気を博した。見世物の動物を見ることは人々にとって目新しく、珍しい動物を見ることで幸福を得られ、開帳の神仏を拝むのと同様に厄払いになり、疫病や悪病を避けることが出来ると考えられていた。北斎以外に象やラクダを描いた作者・作品には、歌川芳豊「中天竺馬爾加国出生新渡舶來大象之図」(1863年/文久3年) や、鈴木春信『白象と唐子』(18世紀)、歌川国安「駱駝之図」(1824年/文政7年) (図③) 等が挙げられる。

<sup>6</sup> 鼠についての解説が記された『和名抄』の書物を基礎にして1712年(正徳2年)に、医師寺島良安が解説した『和漢三才図会』の巻第39に「鼠類」の表題のもとに鼠の種類が書かれている。寺島良安は、白鼠は鼠の一種であり『和漢三才図会』の中で鼠が百歳になると白鼠になるという俗説を退け、これは生まれながらのものであると説いている。白鼠は吉兆と人々から喜ばれ、また忠実な家僕を意味する。

<sup>7</sup> 白鼠を朝廷に献上した記録は下記の通りである。長谷川恩『ネズミと日本文学』による。  
『続日本紀』(卷九) 聖武紀 神亀3年(726) 正月辛巳、京職白鼠を献ず  
『同書』(卷二十九) 称徳紀 神護景雲2年(768) 十一月壬申、美作の掾正六位恩智神主広人、白鼠を献ず

『同書』(卷三十五) 光仁紀 宝亀9年(778) 四月甲申、摂津国白鼠を献ず、十二月癸未、大宰府白鼠の赤眼なるを献ず

<sup>8</sup> 『珍観鼠育草;白鼠のはじまり』定延子(意訳文)(1787年)に記されている。  
“人皇川代後光明院の承応3年の秋に、中国から宇治黄檗山の開祖である隱元禪師が日本に来られた時に、黒眼の白鼠一匹をペットとして持ってこられた。その後に日増しに色々な人たちが黄檗山をお参りしたが、そのついでにこの黒眼の白鼠を欲しがった人がいた。たってのお願いですということで隱元禪師はその希望によっておゆずり下さったのである。譲られた人はこの珍鼠を大変可愛がったので、家がますます富み栄え、召使いに至るまで家中が一同に和して、そしてとうとう大家となって子孫が繁栄した。これは実話である。  
...”

<sup>9</sup> 鼠(動物)に関する作品や、鼠の飼育本を描いた画家・作家。詳細は不明。

<sup>10</sup> 早川純一郎『畜産の研究 マウス-その系統・野生種と将来;『珍観鼠育草』』(養賢堂 1995年)によると、現存する『珍観鼠育草』は3冊あるとされている。すなわち、国立国会図書館所蔵の国会図書館本、甲南女子大学図書館上野文庫所蔵の上野文庫本、香川大学神原文庫所蔵の神原文庫本を指す。

表紙には『珍観鼠育草』(ちんがんそだてくさ)と表題が書かれている。おそらく鼠の音「そ」を「育てる」にかけたか、もしくは重音がリエゾンして省略されたのだと考えられている。

『珍観鼠育草』<sup>ちんがんそだてくさ</sup>の著者については定延子とする説が支持されている。序文では「端書して言 天明七ひつじの正月 定延子」と書かれている。「端書して言う」とは、これから述べることの内容と取り扱う範囲を著者自ら明らかにするという意味であるから、この序文は自序文であると思われ、定延子が著者であると考えられる。

<sup>11</sup> 長谷川恩『ネズミと日本文学』による。

<sup>12</sup> 寺島良安『和漢三才図会、東洋文庫6』が詳しい。

<sup>13</sup> 隨筆。根岸鎮衛著。1814年（文化11年）に出版。立身して勘定奉行・江戸町奉行などを勤めた著者が、巷説・奇談・教訓話などを書き留めたもの。

<sup>14</sup> 日本の民話、伝説で、一種の仙郷。

柳田国男の『日本の昔話』（角川学芸出版、2013年）には、喜界島の志戸桶の天神泊での話が記載されている。男が穴の中に入ると広い畑があり、畑を耕すことが出来たお礼にとお金を授けられる。お伽草子の『かくれ里』は摂津国の中宮のかくれ里に住む鼠の話で、鼠が恵比寿のお供え物を盗んだことから恵比寿と、鼠を使いとする大黒天との合戦が始まると、布袋の仲裁により戦いが終了する。

<sup>15</sup> 松本隆信『御伽草子集 新潮日本古典集成（第34回）』による。

<sup>16</sup> 鼠は「根の国の住人」（根住み）とも見られており、米倉などにある鼠の穴は黄泉の国や淨土への入り口と言い伝えられる地方がある。鼠を神の使いや富をもたらすものとする民間の観念が、この話には反映されている。柳田国男（『海上の道』岩波書店、1978年、165頁）や長谷川恩（『ネズミと日本文学』時事通信社、1979年、5頁ならびに115頁）は、鼠という言葉を“根の国に住むもの（根の国の住人）”と説いたのは、江戸中期の儒学者・政治家の新井白石であると述べている。「根の国」の「根」は“暗いところ”という意味がある。鼠は人々に福をもたらし、穴や地中などの暗いところに住む動物（「かくれ里」という異国に住む動物）であることから、「根の国に住むもの（根の国の住人）」と表現している。

<sup>17</sup> 柳田国男『日本昔話記録13、長崎県壹岐島昔話集』（三省堂、1973年、66-67頁）

<sup>18</sup> 『北斎漫画』「十編」の擬人化された鼠（「家久連里」）は、1866年（慶應2年）の二代目歌川国輝により浮世絵としても仕上げられた。北斎の描いた地中の様子とは異なり、国輝版は地上の里として描いている。

<sup>19</sup> 隨筆。全15巻。津村正恭著。1795年（寛政7年）跋。天明・寛政頃の社会の見聞記や世間話、噂話などを収める。

<sup>20</sup> 谷川士清著。日本書紀研究の段階でメモした言葉の語源を隨筆的に記したもので、1748年（寛延元年）に著された。

<sup>21</sup> インドに渡った中国の唐代の僧、義淨の著わした書。正しくは『大唐南海寄帰内法伝』。全

4巻。

- <sup>22</sup> 書跡・典籍。奈良時代の作品とされている。中期密教經典を論ずる際に重要な位置を占める經典。

## 参考文献

- ・小林忠『江戸浮世絵を読む』筑摩書房、2002年。
- ・内藤正人『江戸の人気浮世絵師』幻冬舎、2012年。
- ・永田生慈『アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品』東京美術、2005年。
- ・白倉敬彦『第一巻 葛飾北斎』学研パブリッシング、2013年。
- ・内田千鶴子『宇宙をめざした北斎』日本経済新聞出版社、2011年。
- ・清水歟『北斎漫画 日本マンガの原点』平凡社、2014年。
- ・瀬木慎一『北斎漫画歳時記』美術公論社、1981年。
- ・有泉豊明『北斎漫画を読む 江戸の庶民が熱狂した笑い』里文出版、2010年。
- ・清水歟『漫画の歴史 岩波新書（新赤版）172』岩波書店、1991年。
- ・清水歟『四コマ漫画—北斎から「萌え」まで』岩波書店、2009年。
- ・今橋理子『兎とかたちの日本文化』東京大学出版社、2013年。
- ・稻田浩二・和子『日本昔話 ハンドブック 新版』三省堂、2001年。
- ・野村純一他『昔話・伝統小事典』みづうみ書房、1987年。
- ・白洲正子『かくれ里 愛蔵版』新潮社、2010年。
- ・松本隆信『御伽草子集 新潮日本古典集成（第34回）』新潮社、1980年。
- ・鳥山石燕『画図百鬼夜行大全集』KADOKAWA、2005年。
- ・戸川幸夫『イヌ・ネコ・ネズミ 彼らはヒトとどう暮らしてきたか』中央公論社、1991年。
- ・定延子『珍観鼠育草』錢屋長兵衛、1787年。
- ・香川大学付属図書館『香川大学付属図書館報 としょかんだより No.35『珍観鼠育草』』香川大学付属図書館、2002年。
- ・三橋健『日本人と福の神—七福神と幸福論』丸善、2002年。
- ・笛間良彦『大黒天信仰と俗信』雄山閣出版、1993年。

図版出典